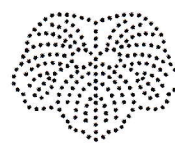


「リゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへ挨拶に伺う。という気持ちでお届けいたします。



# リゅうま伝

第82号

2026年9月26日  
高野 竜馬

## 「最期の手紙」

「Nさんの墓参りに行く」とあるお客様から誘われて秋分の日、二人で職親Nさんのお仏壇に手を合わせてきた高野です。

ことの発端は8月の初盆に私がお花を届けたことでした。お届けたお花に奥様が大変喜ばれ、私に手紙を書こうと便箋を探し出すと、そこに故人が残した私宛の手紙を見つけるのです。

「高野さん 今までいろいろありがとう」とございました。Nさん「間違いないNさんの字です。そしてその時、奥様は私以外のお客様にも手紙を書き残していたのを見つかります。Nさんが親子三代に渡って、親しく

お付き合いしていた会社には、M会長夫妻への手紙がありました。それに続いて、現M社長夫妻に書くというしていた手紙は宛名書きだけで終わる。本文は空白でした。その空白部分に奥様が書き足したお手紙の写真がお客様から私に届きます。

「かつきて、お礼の言葉が書けなかった様です。私には優しい御方と聞いております。お世話になり本当にありがとうございます。ございました。」

本文のない宛名だけの手紙を見た時、胸がジーンとしました。文字にはならなかったNさんの気持ちを感じました。Nさんは奉仕の精神に溢れた人でした。お客様のためなら

どんな面倒も厭わずやる姿は同業者も「そこまでやるのか」と引いてしまうほどでした。それでいて、決して恩に着せるようなところはなく、お客様から氣を使われないようにしていました。

お亡くなりになったのは昨年12月30日。暮しの忙しい時期だからお客様にも知らせろな、と親子以外の葬儀に招かれたのは私ともう一人だけ。決して香典は頂かないようにと遺言するなど、最期まで人に氣を使わず、この命日を選んだのではないかとさえ思えました。そして私がNさんのメッセージに選ばれたような気がしました。年が明けて私はNさんを知るお客様に伝えて回りました。Nさんの遺志を汲んで、お客様もご遺族へのお参りを控えてくれました。けれど私の中には釈然としない思いが

残っていました。

今回一緒にお参りしたM会長はNさんと60年来のお付き合い合いです。きっとお参りしたかったことでしょう。

だからこそNさんのお手紙がきっかけで彼岸参りが出来きて、私の肩の荷が降りた氣がしました。

Nさんの苦勞があつて、引き継がれたお客様がいて、今の私がある。改めて良い仕事をしなくてはと思った。お彼岸でした。



たかの財形事務所

〒819-0374 福岡市西区千里 707-13

☎090-3407-2123

<https://www.takanozaikei.com> メール [fp.takano@gmail.com](mailto:fp.takano@gmail.com)